

ビジネス変革を支える オープンソースソフトウェア

PROVISION 96号 コンテンツ・リーダー

日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・テクノロジー・サービス事業
オファリング&チーフ・テクノロジー・オフィサー
IBM Distinguished Engineer (技術理事)

沢橋 松王 Sawahashi Matsuo



オープンソースソフトウェア(以下、OSS)と聞いて、まず思い浮かべるのはコスト削減ではないでしょうか。ソフトウェア・ライセンス料金の高止まりに頭を悩ませているユーザー企業の話はよく耳にします。OSSにはライセンス料金はかかりませんので、その点だけを見れば確かにコスト削減効果があると言えます。しかし、ユーザー企業がOSSを選ぶ理由の第一位は「システムの柔軟性、要件に応じて機能変更ができる」、第二位が「コスト抑制/低減」、第三位が「システムの俊敏性、変化への対応スピード」となっています(出典:ガートナー、2016年1月)。OSS活用の背景には、変化や柔軟性に対する期待が高く、これはまさにデジタルトランスフォーメーションを狙う企業の期待に応えるものです。

OSSは誰でも無償ですぐに利用できるため、何かアイデアを実現するためにちょっとやってみようといった試行錯誤を繰り返すような場合にも最適です。あるいは、いろいろなOSSを試していくうちに新しいアイデアが生まれることもあります。商用製品にも無償の評価版が利用できるケー

スがありますが、たいていは「事前にしっかり要件定義を行って、製品選定をして、導入する」という流れが一般的だと思います。この場合、後になってやはり別の製品の方が良かったと気付いても、既にライセンス料金の支払いが完了しており、そう簡単に方向転換することはできないでしょう。OSSを活用すれば、ダイナミックにシステムを組み上げ、そして必要に応じてダイナミックに変更していくというアジャイルな進め方が可能になります。これはビジネスの変化が激しい昨今のシステムのあり方に適っています。

これを技術標準の考え方と相反すると捉えられる場合もあるかもしれません。技術標準は、ある技術領域はこの製品や技術でといった標準を定義することによって、サポートする技術者のスキルを分散しないようにして、コスト削減に貢献することを可能にします。しかし、技術標準が行き過ぎると、新しい技術の実装が遅れ、技術者のスキルが古いままになってしまいます。人が定義した標準やプロセスを変えることは、技術を変えることよりも難しい場合があります。これまで踏襲し



てきたやり方や基準に異を唱えるのは簡単ではないことを経験している方も多いでしょう。しかし、新しい技術をどんどん身に付けてスキルアップしたいと思っている技術者は大勢いるはずで、これを固定化してしまうと技術者が離職してしまうリスクが高まります。OSSの活用を促進するには、この技術標準とのバランスを柔軟にしておく必要があります。

それでは、どのようなOSSを選択すべきなのでしょう。これはなかなか難しい問題です。一つの機能を見たときに、その要件を満たすOSSは複数存在します。商用ソフトウェアでも同様ですが、OSSの選択肢は無数に広がっています。浮き沈みにも注意が必要です。活発なコミュニティを有するOSSは技術革新がどんどん進んでいきますが、そうでないOSSは誰も見向きもしなくなります。組み合わせの問題もあります。OSSは通常、ある分野の特化した機能を提供するものが多いので、それらを組み合わせる必要なシステムを組み上げる必要があります。相性や互換性といった問題もあります。これらの問題をユーザー

企業の技術者だけで継続的に解決し続けるのは並大抵の努力では達成できないでしょう。そこで登場するのが、レッドハットをはじめとする、ディストリビューターです。彼らは、複数のOSSから最新かつ要件にあうOSSを選定し、組み合わせ、テストして商用パッケージとして配布しています。このようなディストリビューションを利用すれば、将来性のあるOSSを利用し続けることが可能になります。

本特集では、実際にOSSを積極的に活用して、ビジネス変革を体現しているお客様の事例を紹介し、続いて、開発からデプロイ、運用までのアプリケーション・ライフサイクルに必要な最新OSSを紹介し、さらに、OSSを取り巻くビジネスモデルについてレッドハットの岡下氏からの寄稿を紹介し、最後に、ライセンスやサポートなどのOSS利用時に課題となる面にも触れます。本特集を通して、皆様のビジネス変革を支えるOSSの活用のヒントになれば幸いです。